

宝 軽 法 重 事

建治二年五月一日 五五歳

たかな 又二十本 た
筍 百本、 追ひ給び了んぬ。

妙法蓮華經第七に云はく「若し復人有って七宝を以て、三千大千世界に満て、仏及び大菩薩・辟支仏・阿羅漢に供養せん。是の人所得の功德も此の法華經の乃至一四句偈を受持する其の福の最も多きには如かじ」云云。文句の第十に「七宝を四聖に奉るは一偈を持つに如かずといふは、法は是聖の師なり、能生・能養・能成・能栄法に過ぎたるは莫し。故に人は軽く法は重し」云云。記の十に云はく「父母の必ず四の護を以て子を護るが如し。今発心は法に由るを生と爲し、始終随逐するを養と爲し、極果を満ぜしむるを成と爲し、能く法界に應ずるを栄と爲す。四つ同じからずと雖も法を以て本と爲す」云云。經並びに天台妙樂の心は、一切衆生を供養せんと、阿羅漢を供養せんと、乃至一切の仏を尽くして七宝の財を三千大千世界にもりみて、供養せんよりは、法華經を一偈、或は受持し、或は護持せんはすぐれたり云云。經に云はく「此の法華經の乃至一四句偈を受持する其の福の最も多きには如かじ」と。天台云はく「人は軽く法は重し」と。妙樂云はく「四同じからずと雖も法を以て本と爲す」云云。九界の一切衆も仏に相對して此をはかるに、一切衆生の福は一毛のかるく、仏の御福は大山の重きがごとし。一切の仏の御福は梵天三昧の衣のかるきがごとし。法華經一字の御福の重き事は大地のをもきがごとし。人軽しと申すは仏を人と申す。法重しと申すは法華經なり。夫法華已前の諸經並びに諸論は仏の功德をほめて候、仏のごとし。此の法華經は經の功德をほめたり、仏の父母のごとし。

華嚴經・大日經等の法華經に劣る事は一毛と大山と三昧と大地とのごとし。乃至法華經の最下の行者と華嚴・真言一切の最上の僧とくらぶれば、帝釈と彌猴と師子と兔との勝劣なり。而るをたみが王とのしればかならず命となる。諸經の行者が法華經の行者に勝れたりと申せば、必ず国もほろび、地獄へ入り候なり。但しかたきのなき時はいつわりをろかにて候。譬へば将門・貞任も、貞盛・頼義がなかりし時は国をしり、妻子安穩なり云云。敵なき時はつゆも空へのぼり、雨も地に下り、逆風の時は雨も空へあがり、日出の時はつゆも地にをちぬ。されば華嚴等の六宗は伝教なかりし時はつゆのごとし。

真言も又かくのごとし。強敵^{ごうてき}出現して法華經をもつてつよくせむるならば、叡山の座主
・東寺の小室等も日輪に露のあへるがごとしとをぼしめすべし。

法華經は弘^弘明後二千二百余年に、いまだ經のごとく説ききわめてひろむる人なし。天台・伝教もしろしめさざるにはあらず。時も来たらず、機もなかりしかば、かききわめ^{書 究}ずしてを^終わらせ給へり。日蓮か弟子とならむ人々はやすくしりぬべし。一閻浮提^{えんぶだい}の内に法華經の寿量品の釈迦仏の形像をかきつくれる堂塔いまだ候はず。いかでかあらわれさせ給はざるべき。しげければとゞめ候。

たけのこは百二十本、法華經は二千余年にあらわれ候ひぬ。布施はかるけれども志重き故なり。当時はくわん^{勤 農}のうと申し、大宮づくりと申し、かたがた民のいとまなし。御心ざしふかければ法もあらわれ候にや。恐々謹言。

五月十一日

日 蓮 花 押

西山殿御返事